岩日タイムズ

発行者

岩瀬日本大学
高等学校
ソーシャルメディア部

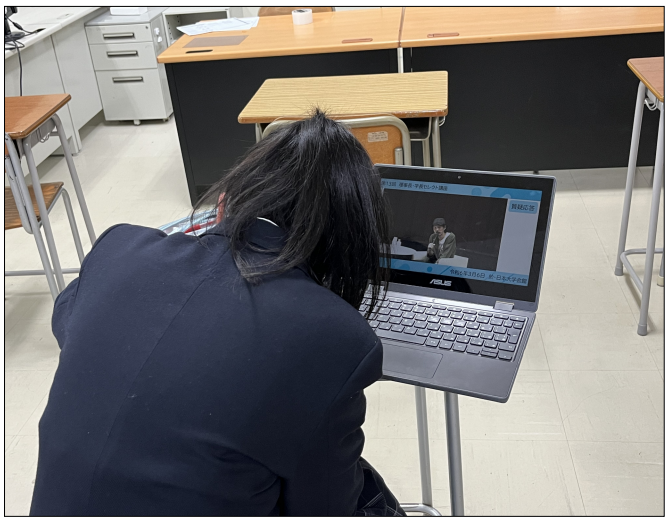
村上 綾菓

クドカンさん 今伝えたいこと

日大生に自らの経験を語る

日大理事長・学長セレクト講座

3月6日、日本大学会館本館において、第13回理事長・学長セレクト講座が開催された。脚本家の宮藤官九郎さんによる講演「卒業だけはしとけばよかった」がライターの上田智子さんとの対話形式で行われた。（村上）



宮藤官九郎さんの講演を視聴する部員

宮藤さんは高校卒業後、日本大学芸術学部（以下、日芸）放送学科に入学。在学中に小劇場「大人計画」のメンバーとなる。その後、大学4年で中退。現在の活動はドラマの脚本を中心に俳優、ラジオパーソナリティ、放送作家など多岐に渡る。代表作に「木更津キャッツアイ」、NHK連続テレビ小説「あまちゃん」、大河ドラマ「いだてん～東京オリムピック噺～」「ゆとりですがなにか」などがある。

宮藤さんは、上田さんからの質問に一つ一つ丁寧に答えた。まず上田さんは、宮藤さんが日芸を志望した理由を一番最初に質問した。

宮藤さんは高校時代、ビートたけしさんのファンで、たけしさんのラジオを毎回聴いては、ハガキを送っていた。このラジオを担当していた人が、放送作家の高田文夫さんだった。高田さんの出身大学が日芸だったことから、上京して日芸に進学した。当時を振り返って宮藤さんは、「自分のことを天才だと思っていた」と話す。

やがて年に4～5本の舞台を行っていた「大人計画」の仕事に追いつかず、大学を辞めることになったが、今振り返ってみると、後悔しているという。生活費のため、アルバイトも行いながら、24歳から25歳の頃、所属していた小劇場での活躍はあったものの、大卒の同級生のようにキャリアアップという経験がなかったことにコンプレックスを抱く。また、その頃に放送作家としての活動を始めたところ、自らのネタが企画会議で却下される日々が続く。自分が一番面白いと思い込み、自意識過剰だったことに気づいた。

学生に「独りよがりやどんなジャンルでも、自分が一番だ、と思うことが一番良くない」「学生の頃は学校を卒業することはもちろん、学生時代に遊ぶことも大切だったと気付いた」。

学生からの質疑応答にも丁寧に答えた。「締切とクオリティーのどちらを大切にすべきか」という質問に、締切を過ぎても納得いく作品が作れないという可能性もあるので、少し妥協してでも提出期限は守った方がいい。自分が「恥ずかしい」と思うことを恥ずかしいと思わないこと、周囲の人を気にしすぎないこと、「誰もやらないことをやりたい」という気持ちを大切にしてほしいと呼び掛けた。

「理事長・学長セレクト講座」

2022年から始まった学内限定イベントで、多くの著名人の講演を直接聴くことができる非常に貴重な機会である。第1回は2022年10月21日に精神科医の和田秀樹さん。

今回の宮藤さんで第13回の講演となる。付属高校生徒も対面形式かオンライン配信のいずれかを選び参加が可能である。

編集後記

今回の講演では、とても興味深いことが聞けた。私自身、宮藤さんの作品を何度も見たことがあったので、大学時代や20代の頃、宮藤さんが感じていたこと、後悔したことなどを知ることができて、とても貴重な経験となった。（村上）